

令和元年度
沖縄子供の貧困緊急対策事業
社会資源量調査・支援状況等調査について



令和2年6月26日

内閣府沖縄振興局事業振興室
沖縄県子ども生活福祉部子ども未来政策課

目次

I	調査概要	1
II	社会資源量調査 調査結果	2
III	支援状況等調査 調査結果	12
	第1節 保護者に関する分析	12
	第2節 子どもに関する分析	20
IV	考察及び総合総括	28

I 調査概要

1 調査の目的

沖縄県における、子どもの居場所を含む社会資源の整備状況を調査・集計するとともに、支援を必要とする家庭における当該社会資源の活用状況及び支援状況を把握し、今後の沖縄子供の貧困緊急対策事業の優先度等の整理に活用することを目的とする。

2 調査票種別

- (1) 社会資源量調査（自治体用）
- (2) 支援状況等調査（保護者用・子ども用）

3 調査実施日

令和元年11月

4 収集方法・回収状況

社会資源量調査箇所数（うるま市と糸満市をモデルに市内社会資源を調査）

- ・うるま市 173箇所の社会資源のうち116箇所から回答
- ・糸満市 95箇所の社会資源のうち77箇所から回答

支援状況等調査配布数（就学援助制度の受給世帯）

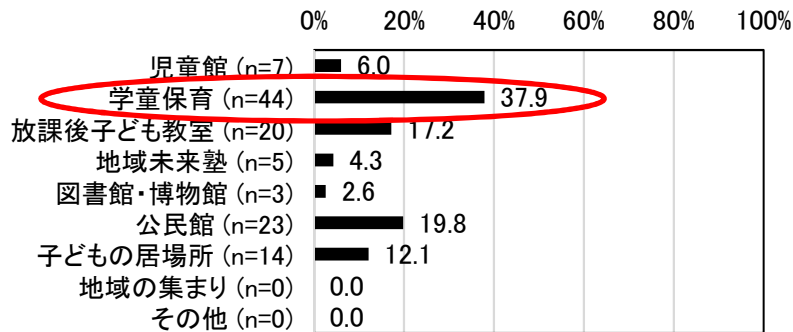
- ・保護者用 配布数：2871件 回収数（回収率）：494件（17.2%）
- ・子ども用 配布数：5104件 回収数（回収率）：814件（15.9%）

Ⅱ 社会資源量調査 調査結果

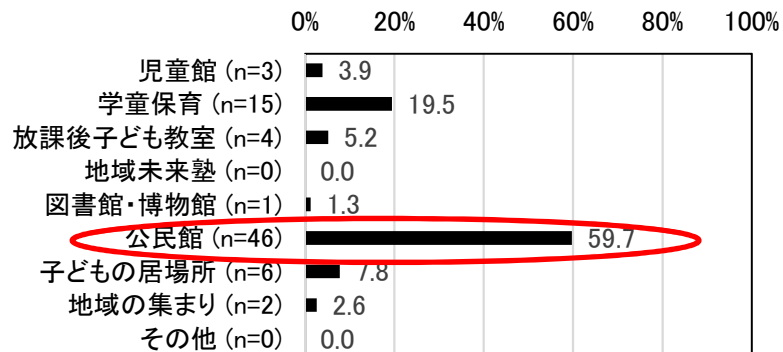
社会資源量調査に関する調査結果

◇社会資源の種類

【うるま市】



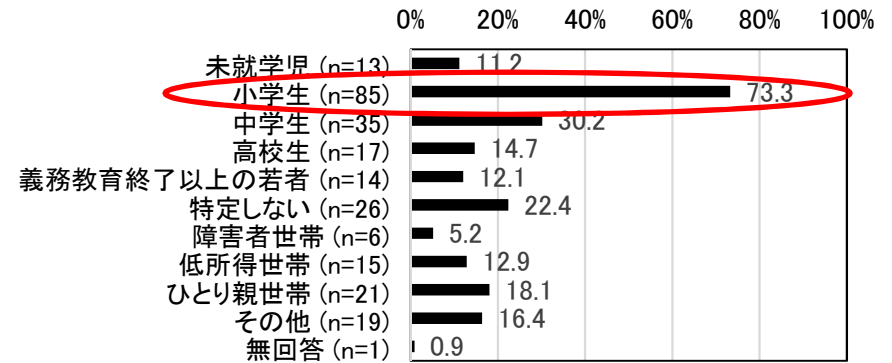
【糸満市】



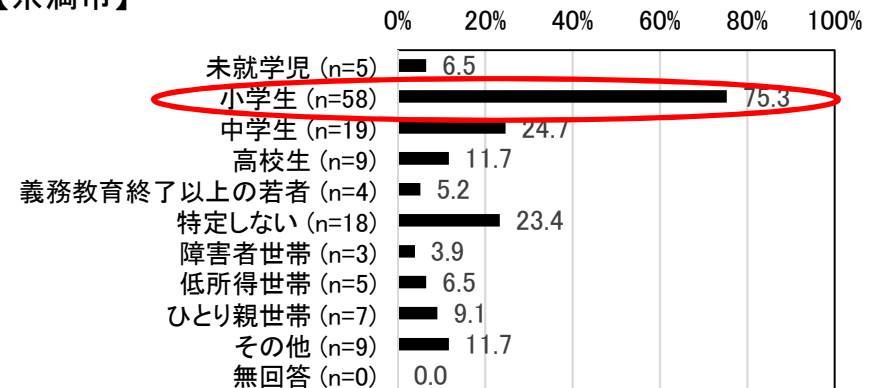
社会資源の種類では、うるま市では「学童保育」（37.9%）、糸満市では「公民館」（59.7%）が最も高い割合となっている。

◇社会資源の対象者

【うるま市】



【糸満市】



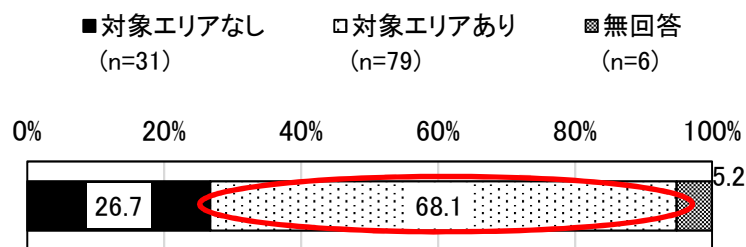
社会資源の対象者では、うるま市、糸満市いずれも「小学生」が最も割合が高くなっている。

社会資源量調査に関する調査結果

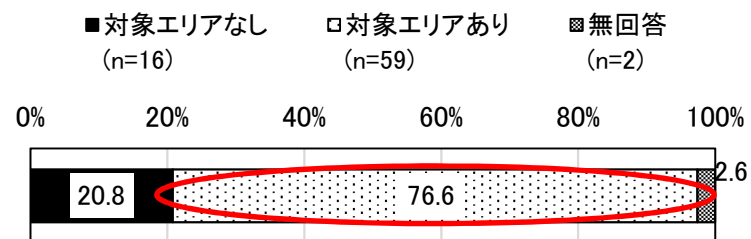
◇社会資源の対象エリア

◇対象エリアの範囲

【うるま市】

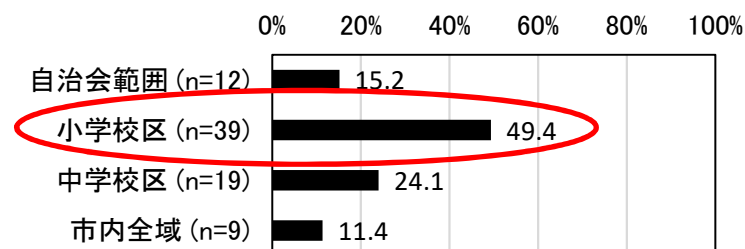


【糸満市】

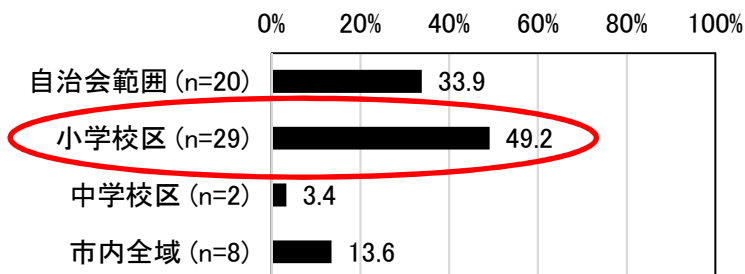


うるま市の社会資源の68.1%、糸満市の社会資源の76.6%が対象エリアを設定している。

【うるま市】



【糸満市】

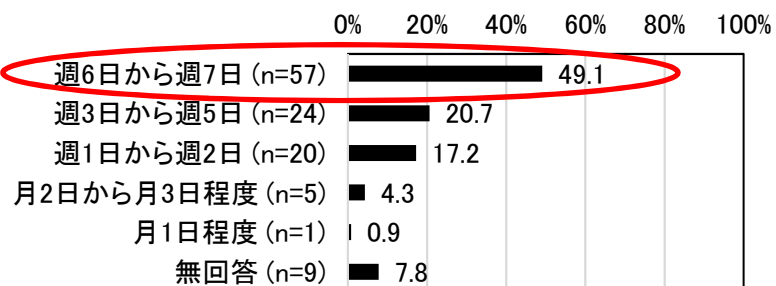


対象エリアを設定している社会資源の対象範囲は、うるま市、糸満市いずれも「小学校区」が最も高い割合となっている。

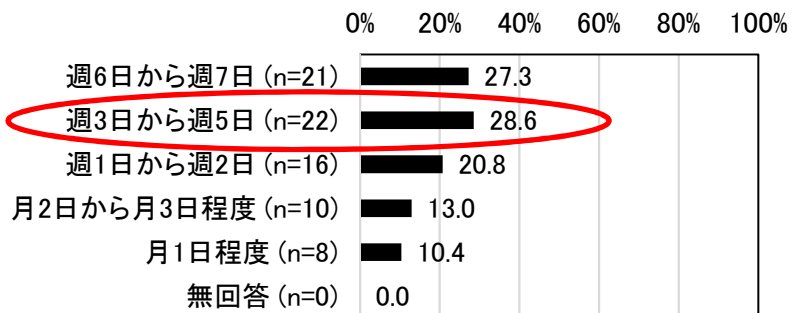
■社会資源量調査に関する調査結果

◇開設状況（開設頻度）

【うるま市】



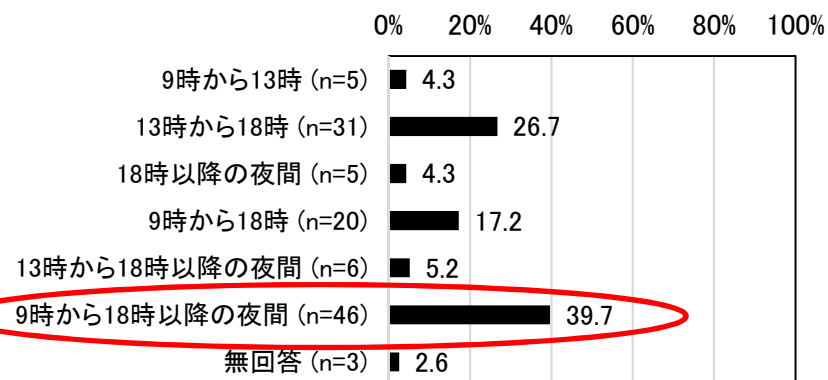
【糸満市】



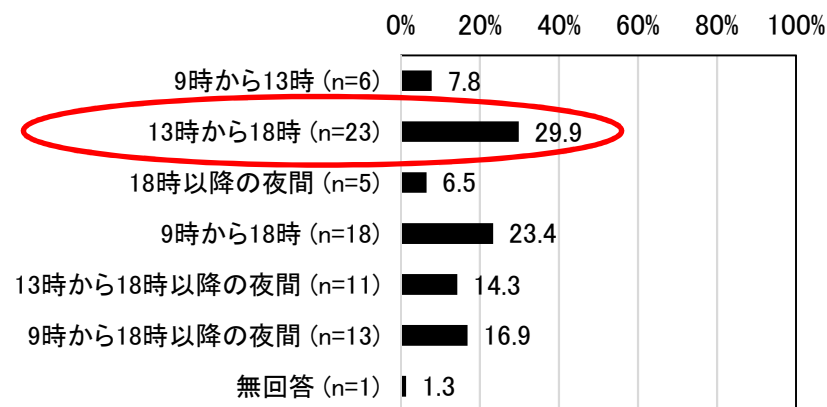
うるま市では「週6日から週7日」(49.1%)、糸満市では「週3日から週5日」(28.6%)が最も割合が高くなっている。

◇開設状況（開設時間）

【うるま市】



【糸満市】

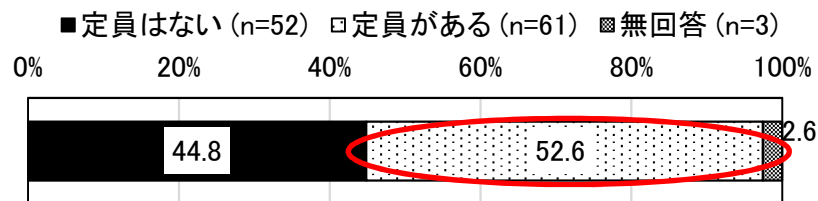


うるま市では「9時から18時以降の夜間」(39.7%)、糸満市では「13時から18時」(29.9%)の割合が最も高くなっている。

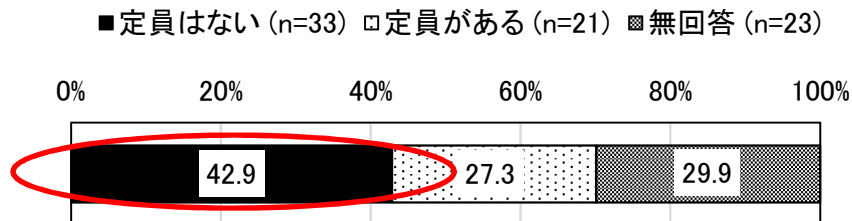
社会資源量調査に関する調査結果

◇定員（定員の有無）

【うるま市】



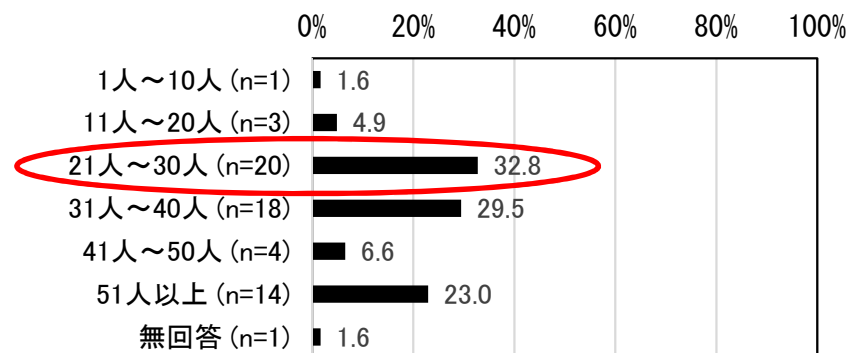
【糸満市】



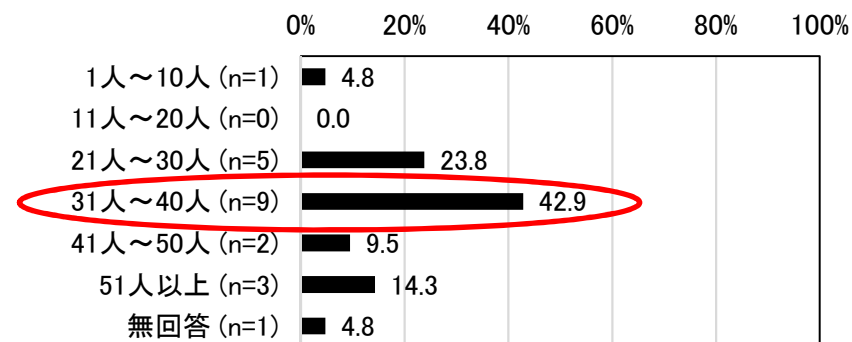
うるま市では「定員がある」社会資源が52.6%で「定員はない」より高い割合となっているのに対し、糸満市では「定員はない」社会資源が42.9%で「定員がある」より高い割合となっている。

◇定員（定員数）

【うるま市】



【糸満市】

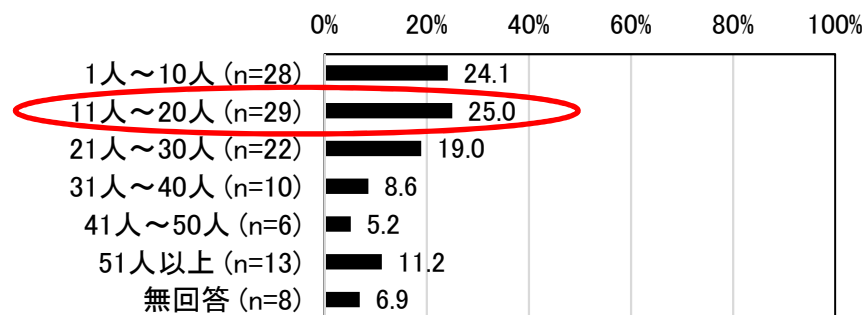


「定員がある」場合の人数について、うるま市では「21人～30人」（32.8%）、糸満市では「31人～40人」（42.9%）の割合が最も高くなっている。

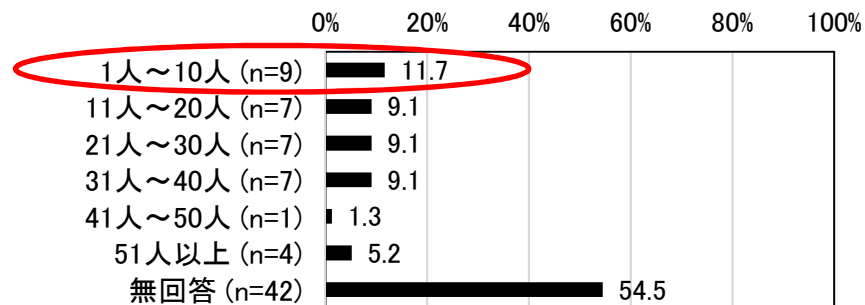
■社会資源量調査に関する調査結果

◇一日当たりの平均利用人数

【うるま市】



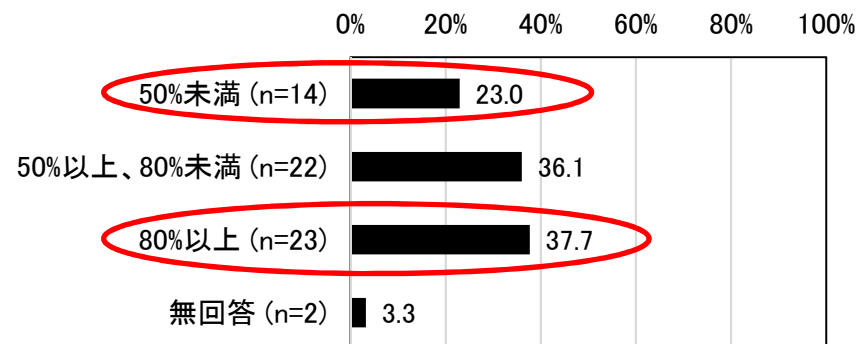
【糸満市】



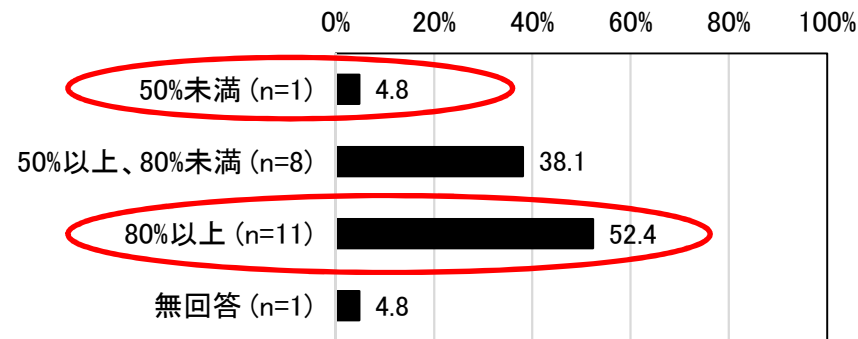
うるま市では「11人～20人」(25.0%)、糸満市では「1人～10人」(11.7%)が最も高い割合となっている。

◇定員に占める平均利用人数の割合

【うるま市】



【糸満市】

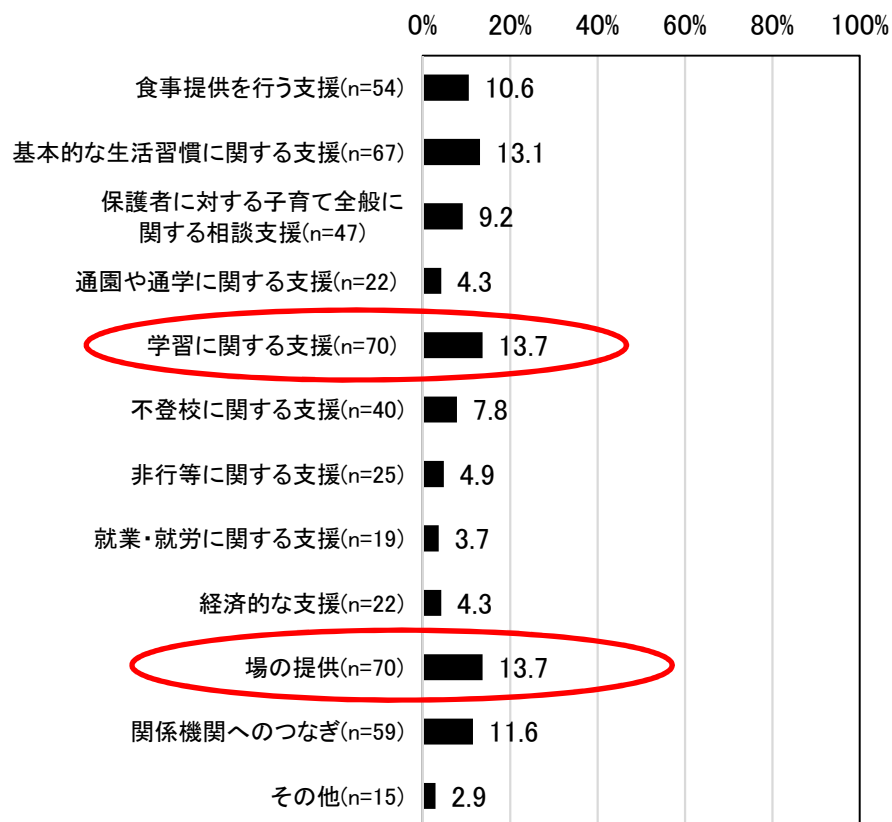


利用人数が定員の「50%未満」となっている社会資源は、うるま市では社会資源全体の23.0%、糸満市では4.8%となっている。利用人数が定員の「80%以上」を満たしている社会資源は、うるま市では社会資源全体の37.7%、糸満市では52.4%となっている。

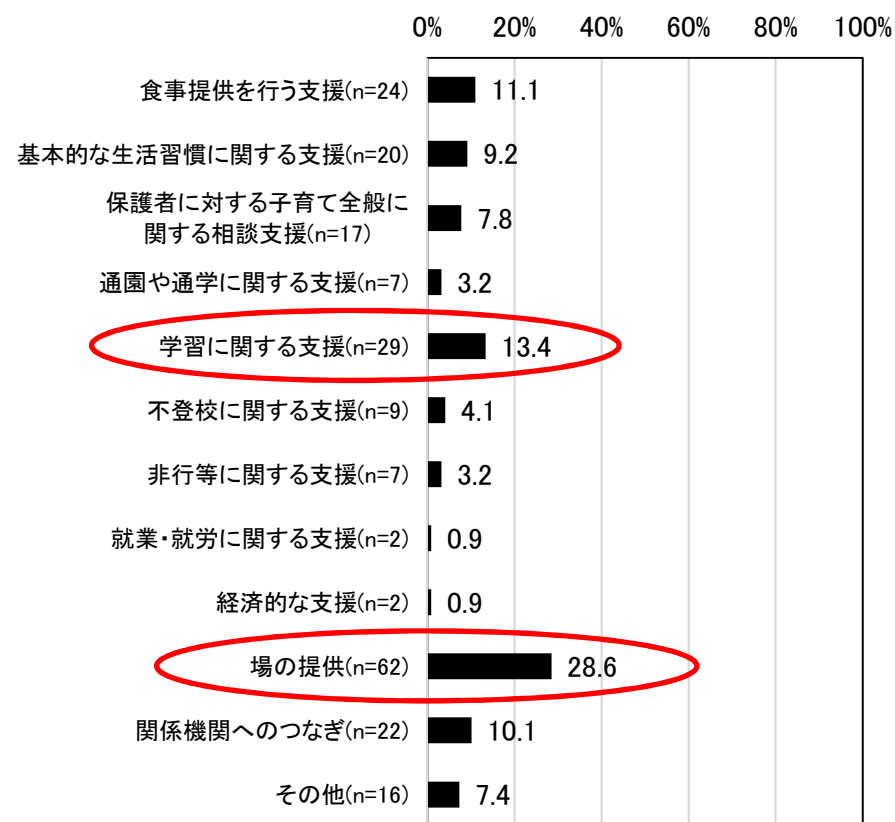
社会資源量調査に関する調査結果

◇提供サービスの内容

【うるま市】



【糸満市】



うるま市では「学習に関する支援」、「場の提供」が13.7%と同率で割合が高く、糸満市では「場の提供」が28.6%、次いで「学習に関する支援」が13.4%で割合が高くなっており、両市とも、「場の提供」及び「学習に関する支援」に関するサービスを提供している社会資源の割合が高くなっている。

■ 社会資源量調査に関する調査結果

◇ 小学校区別に見た社会資源一覧（うるま市）

社会資源種類 小学校区	児童館	学童保育	放課後子ども教室	地域未来塾	図書館・博物館	公民館	子どもの居場所	地域の集まり	その他	合計
川崎小学校		5箇所	1箇所			3箇所				8箇所
天願小学校	1箇所	7箇所				5箇所	3箇所			16箇所
あげな小学校		2箇所	1箇所	1箇所		2箇所				6箇所
田場小学校		3箇所	2箇所			4箇所	2箇所			11箇所
具志川小学校		1箇所	1箇所			1箇所				3箇所
兼原小学校		8箇所	2箇所	1箇所	1箇所	4箇所	1箇所			17箇所
赤道小学校		3箇所	1箇所			3箇所				7箇所
中原小学校		3箇所	1箇所			3箇所				7箇所
高江洲小学校	1箇所	2箇所	2箇所	1箇所		5箇所	2箇所			13箇所
宮森小学校		2箇所	1箇所			5箇所	1箇所			9箇所
城前小学校	1箇所	2箇所	2箇所	1箇所	1箇所	4箇所	4箇所			15箇所
伊波小学校		3箇所	2箇所	1箇所		6箇所	1箇所			13箇所
南原小学校		2箇所	2箇所	1箇所		1箇所				6箇所
勝連小学校		2箇所			1箇所	2箇所				5箇所
与那城小学校	1箇所	1箇所	1箇所	1箇所		5箇所	3箇所			13箇所
平敷屋小学校	1箇所	1箇所	1箇所			1箇所	2箇所			6箇所
津堅小学校			1箇所	1箇所		1箇所				3箇所
彩橋小学校	1箇所	1箇所	1箇所	1箇所		8箇所	2箇所			14箇所
校区なし		1箇所								1箇所
合計	6箇所	49箇所	22箇所	9箇所	3箇所	63箇所	21箇所	0箇所	0箇所	173箇所

社会資源量調査に関する調査結果

◇小学校区別に見た社会資源一覧（糸満市）

社会資源種類 小学校区	児童館	学童保育	放課後子ども教室	地域未来塾	図書館・博物館	公民館	子どもの居場所	地域の集まり	その他	合計
兼城小学校		1箇所				8箇所	2箇所			11箇所
糸満小学校	1箇所	1箇所				6箇所	2箇所			10箇所
糸満南小学校		1箇所	1箇所		1箇所	5箇所	1箇所	1箇所		10箇所
高嶺小学校		2箇所				6箇所		1箇所		9箇所
真壁小学校		1箇所	1箇所			10箇所				12箇所
喜屋武小学校			1箇所			5箇所				6箇所
米須小学校		1箇所				6箇所	1箇所			8箇所
西崎小学校	1箇所	2箇所				5箇所	2箇所	1箇所		11箇所
潮平小学校		2箇所				3箇所	1箇所			6箇所
光洋小学校		4箇所	1箇所			6箇所	1箇所			12箇所
合計	2箇所	15箇所	4箇所	0箇所	1箇所	60箇所	10箇所	3箇所	0箇所	95箇所

社会資源量調査 調査結果まとめ

- 社会資源の種類は、うるま市は「学童保育」、糸満市は「公民館」が最も割合が高くなっている。
- 社会資源の対象者、対象エリアは、うるま市、糸満市いずれも「小学生」、「小学校区」が最も割合が高くなっている。
- 開設状況は、両市ともおおむね高い頻度で開設されているが、うるま市の社会資源が糸満市の社会資源より開設頻度や開設時間が多く(長く)設定されている。
- 定員は、うるま市で「定員がある」、糸満市で「定員はない」の割合が高く、両市で違いが見られた。定員数は、両市ともおおむね21~40人の幅で設定している。1日当たりの平均利用人数は、両市ともおおむね20人以内となっている。
- 提供サービスは、両市とも「学習に関する支援」及び「場の提供」を行う社会資源の割合が高い。



今回の調査では社会資源量の対象と開設状況や定員、提供サービス等について明確な関連まで分析することはできなかった。

しかしながら、今後、各自治体が施策を検討する際、自治体の規模や(後述する)支援を必要とする就学援助世帯等の社会資源の利用状況や認知度等も踏まえながら社会資源の設置等を検討するための参考になっていくものと考えられる。

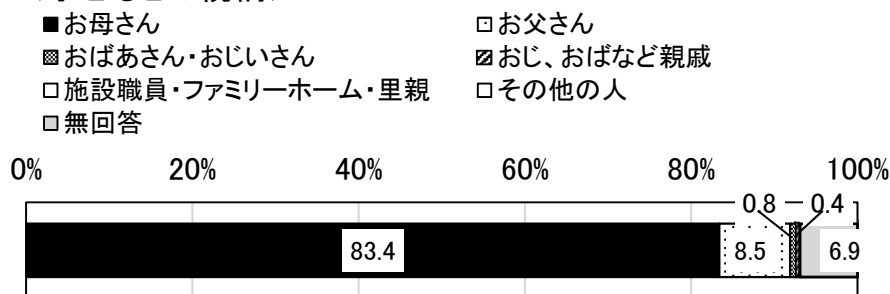
Ⅲ 支援状況等調査 調査結果

第1節 保護者に関する分析

■ 支援状況等調査に関する調査結果（保護者）

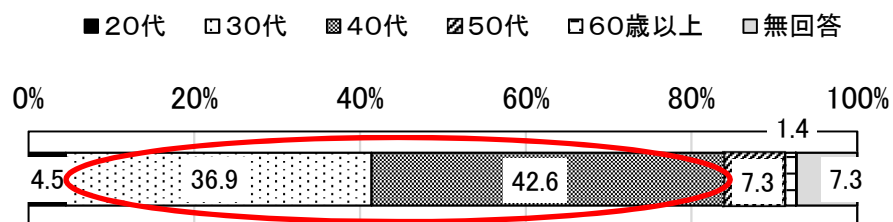
◇ 回答者の内訳・年齢

<子どもとの続柄>



回答者の有効サンプルは493名
 子どもとの続柄は、「お母さん」が83.4%と最も割合が高く、次いで「お父さん」(8.5%)、「おばあさん・おじいさん」(0.8%)、「おじ、おばなど親戚」(0.4%)となっている。

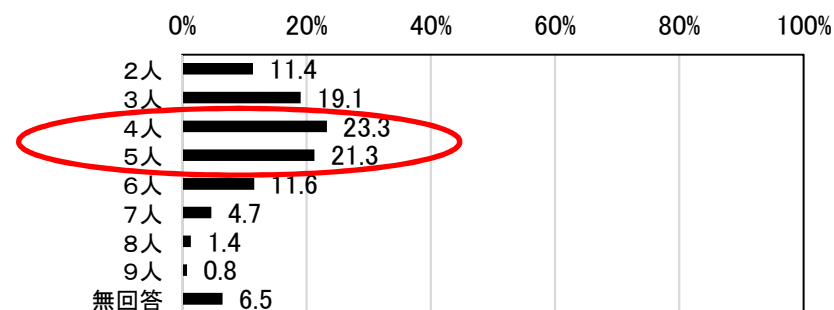
<年齢>



年齢は、30代と40代で約8割を占めている。

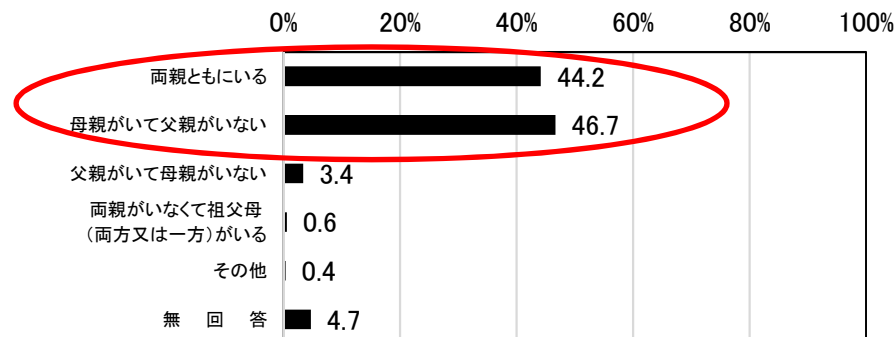
◇ 回答者の家族

<家族の人数>



家族の人数は、「4人」が23.3%で最も割合が高く、次いで「5人」が21.3%となっている。

<家族構成>

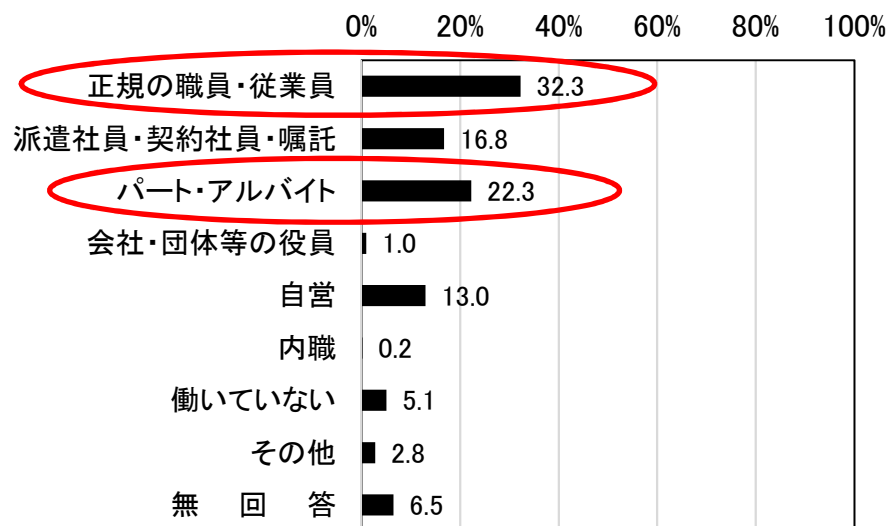


家族構成は、母子家庭が46.7%で最も割合が高く、次いで両親ともにいるが44.2%となっている。

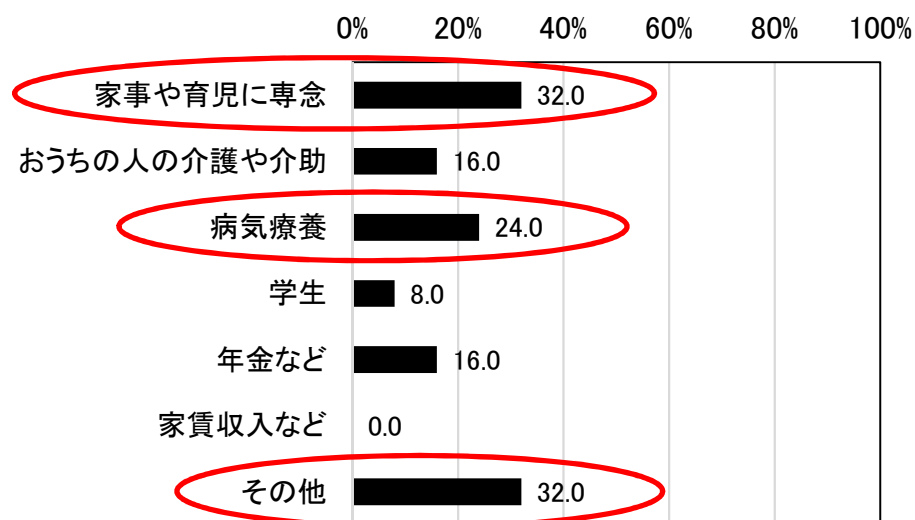
■ 支援状況等調査に関する調査結果（保護者）

◇ 就労状況

＜生計を支えている方の就労状況＞



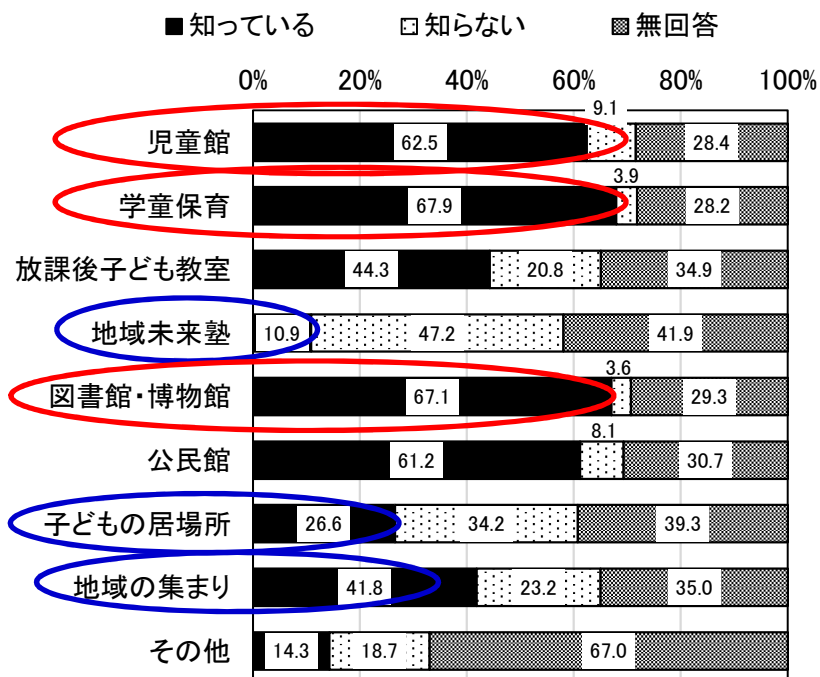
＜就労していない理由＞



＜主に生計を支えている方の就労状況＞は、「正規の職員・従業員」が約3割で、「パート・アルバイト」が約2割となっている。また、「働いていない」回答者の＜就労していない理由＞では、「家事や育児に専念」及び「その他」が約3割となっており、次いで「病気療養」が約2割となっている。

■ 支援状況等調査に関する調査結果（保護者）

◇ 社会資源の認知度

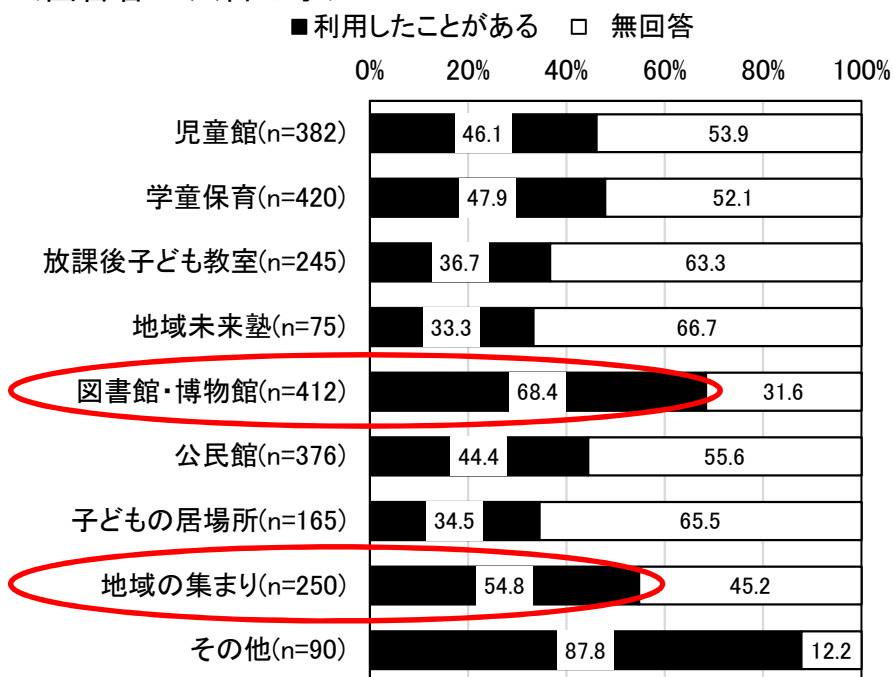


認知度が高い社会資源では、「学童保育」が67.9%と最も高く、次いで「図書館・博物館」（67.1%）、「児童館」（62.5%）となっている。

認知度が低い社会資源では、「地域未来塾」が10.9%と最も低く、次いで「子どもの居場所」（26.6%）、「地域の集まり」（41.8%）となっている。

◇ 社会資源の利用状況

<回答者:1人目の子>



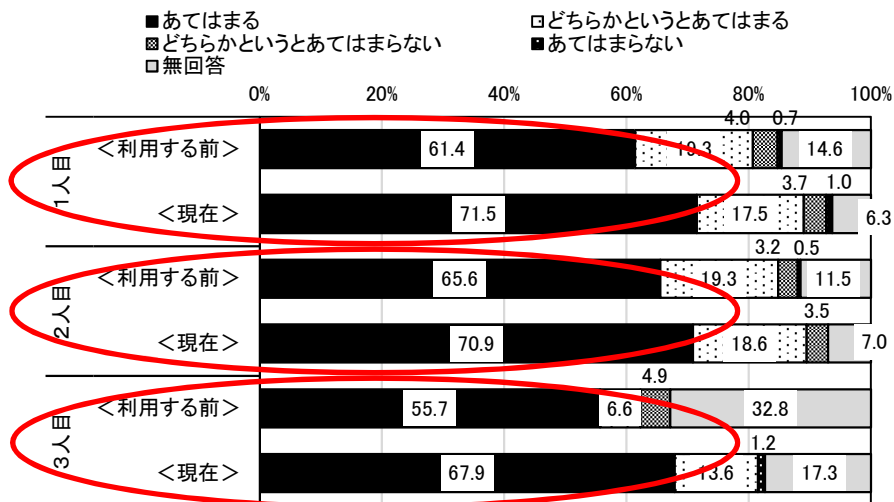
1人目の子どもが利用したことがある社会資源では、「その他」を除くと、「図書館・博物館」が68.4%と最も割合が高く、次いで「地域の集まり」が54.8%となっている。

なお、2人目、3人目も同様の傾向となっている。

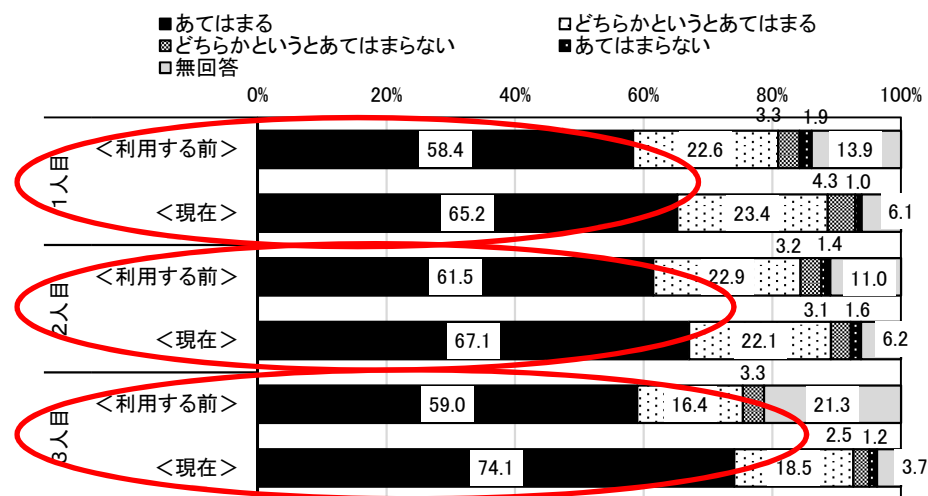
■ 支援状況等調査に関する調査結果（保護者）

◇ 1番よく行く社会資源利用前後の子どもとの関係の変化

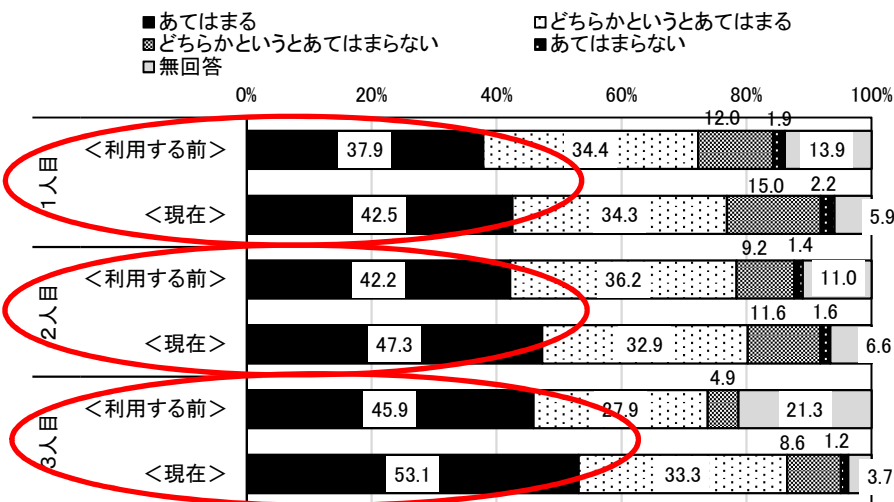
<お子さんと会話をしますか>



<お子さんを信頼していますか>



<お子さんと十分時間を過ごしていますか>

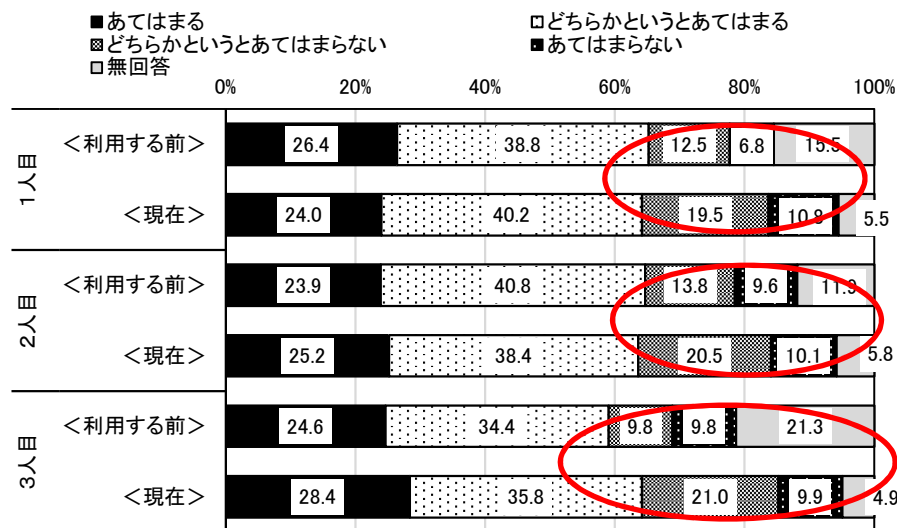


子ども（1人目、2人目、3人目）が社会資源を利用したことにより、利用前に比べて保護者にとって、子どもとの会話や、一緒に過ごす時間、信頼関係など、子どもとの関係に効果的な影響があらわれている。

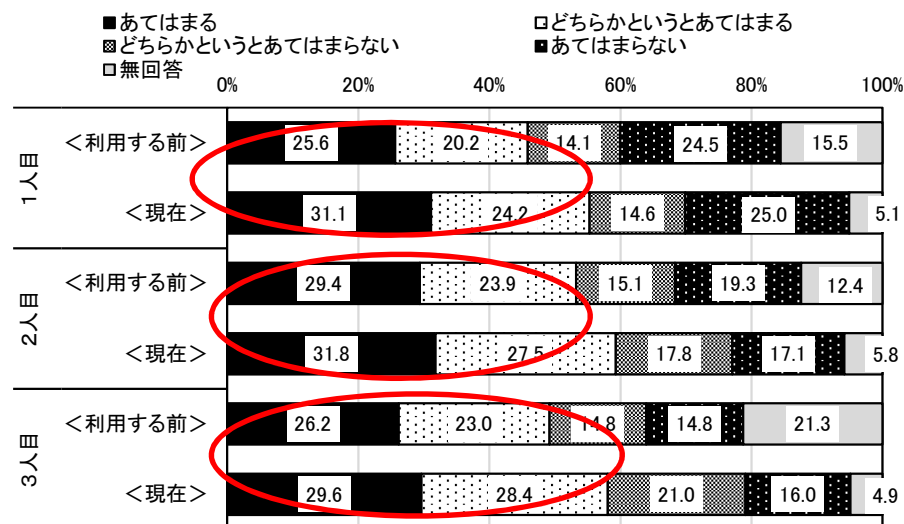
■ 支援状況等調査に関する調査結果（保護者）

◇ 1番よく行く社会資源利用前後の育児負担感の変化

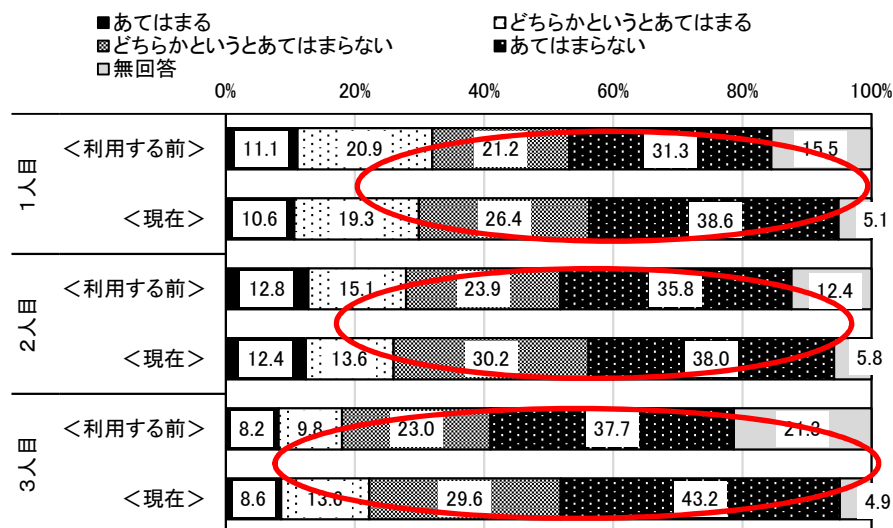
＜不安やイライラなどの感情を子どもに向けたことがある＞



＜近所でふだん世間話をしたり、お子さんの話をしたりする人が数人いる＞



＜自分一人で育てているという圧迫感を感じる＞

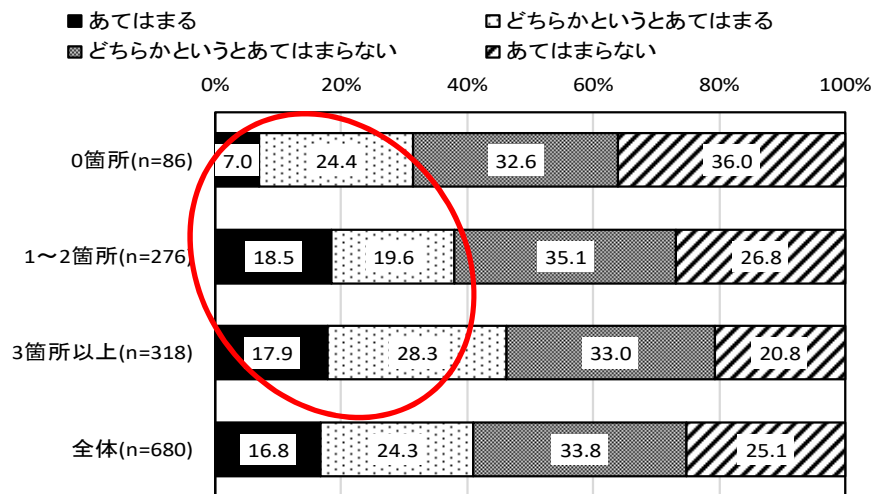


子ども（1人目、2人目、3人目）が社会資源を利用したことにより、利用前に比べて、保護者にとって、子どもに対する感情や、子育てに対する圧迫感、周囲との関係など、育児に対する負担感に効果的な影響があらわれている。

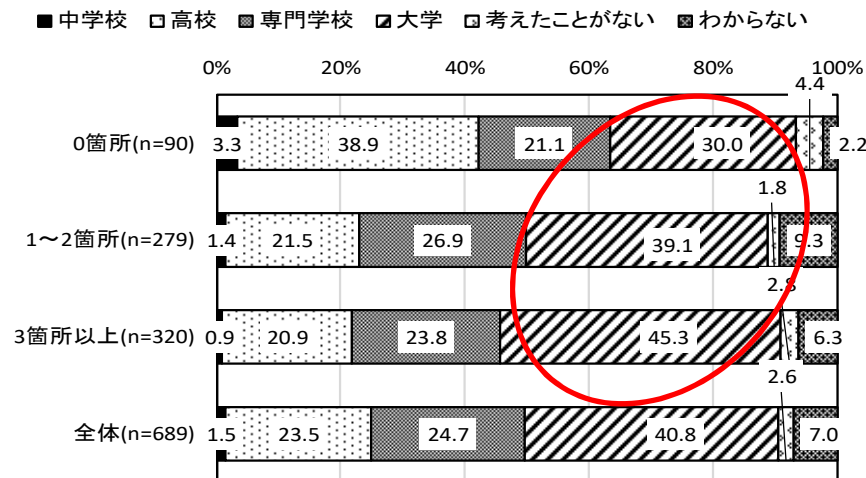
社会資源の利用箇所数別に見た分析結果（保護者）

◇子育て意識や進路観との関連（利用箇所数別）

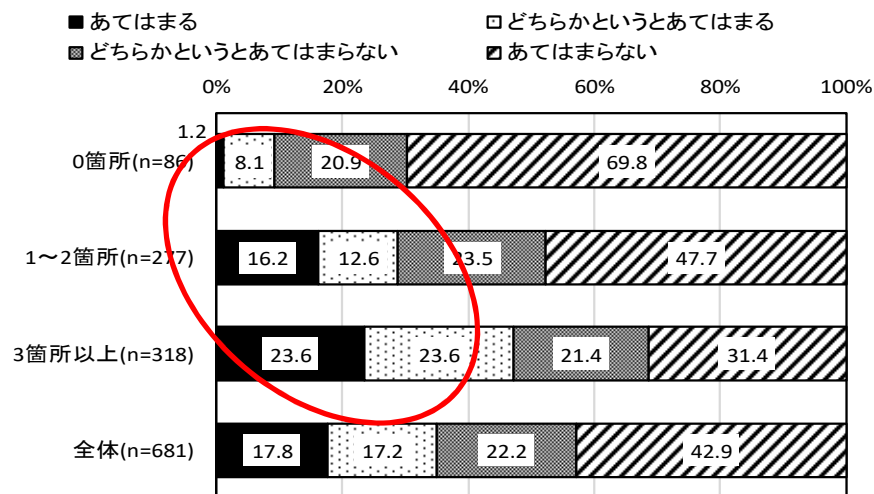
<読んだ本の感想の話し合い>



<子どもに受けさせたい教育>



<子どもと図書館に行く>



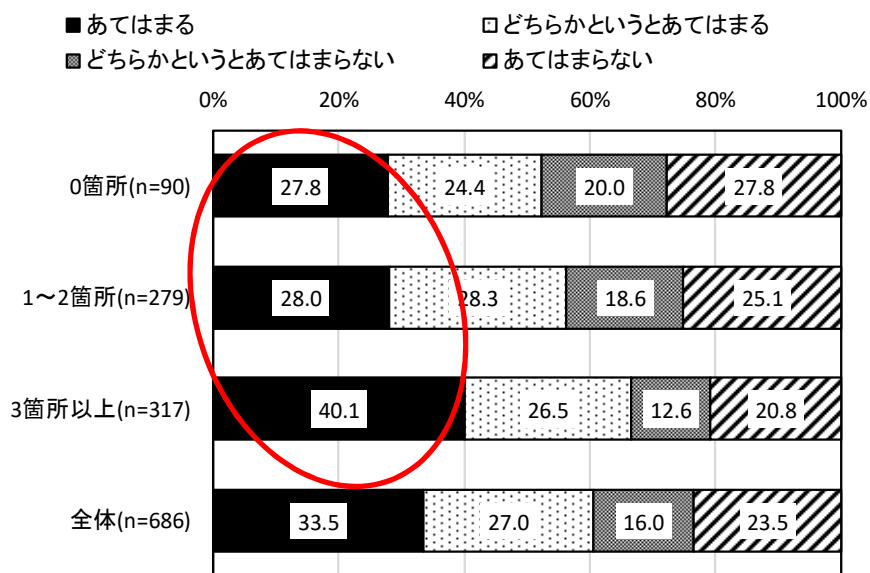
社会資源の利用箇所数が多くなるにつれて、「子どもと読んだ本の感想を話し合う経験」、「子どもと図書館に行く経験」に効果的な影響を与えることが推測される。

また、「子どもに受けさせたい教育」では、高等教育の割合が高くなっている。

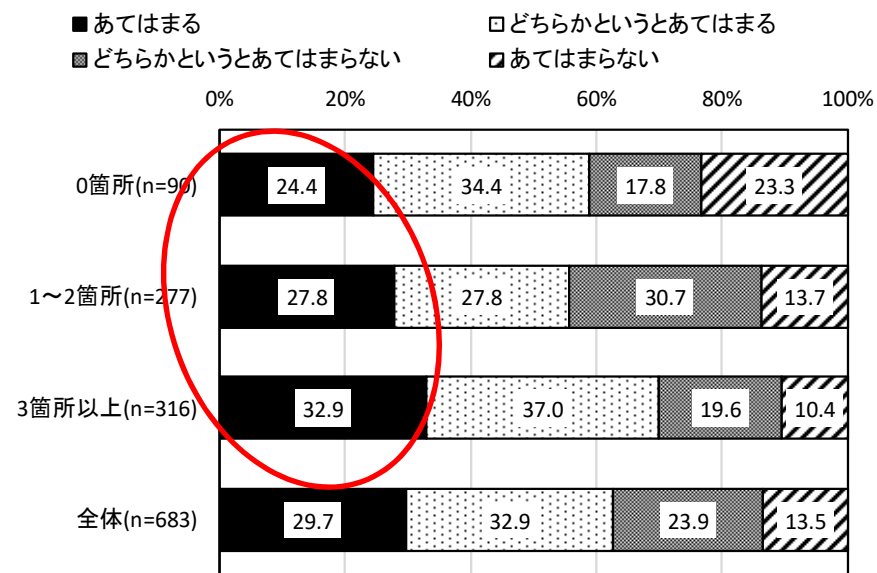
■ 社会資源の利用箇所数別に見た分析結果（保護者）

◇ 育児負担感との関連（利用箇所数別）

＜近所でふだん世間話をしたり、
お子さんの話をしたりする人が数人いる＞



＜育児や家庭のことについて、
他の人とおしゃべりすることが好き＞



社会資源の利用箇所数が増えるにつれて、周囲の話す人や話すことを楽しむ割合が増えており、保護者の育児に関するネットワーク作りに、社会資源の利用箇所数が影響を与えていることが推測される。

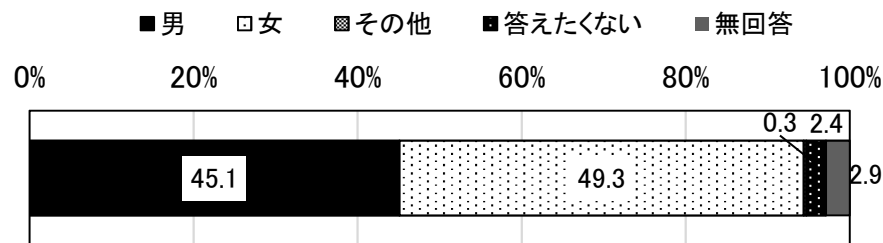
Ⅲ 支援状況等調査 調査結果

第2節 子どもに関する分析

■ 支援状況等調査に関する調査結果（子ども）

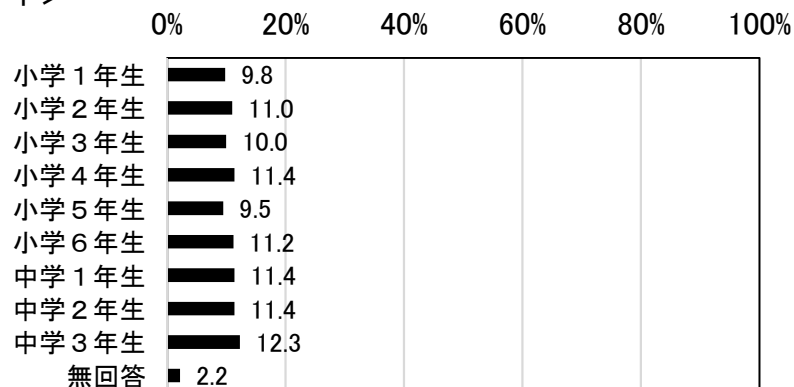
◇ 回答者の性別・学年

<性別>



回答者の有効サンプルは783名
性別は「女性」が49.3%、「男性」が45.1%
となっている。

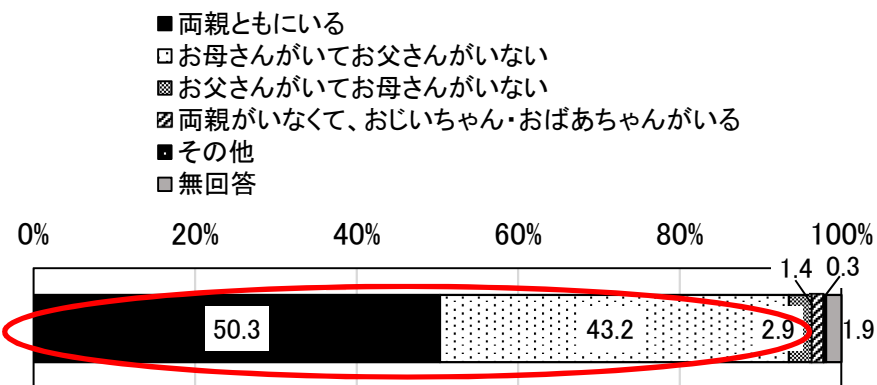
<学年>



学年については、各学年が約10～12%で
おおむね均等に分布している。

◇ 回答者の家族構成

<家族構成>

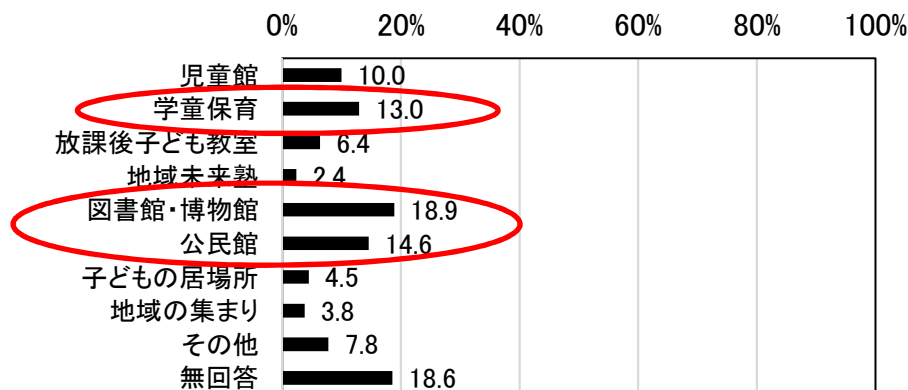


家族構成は、「両親ともにいる」が50.3%で
最も割合が高く、次いで「お母さんがいてお父
さんがいない」が43.2%となっている。

■ 支援状況等調査に関する調査結果（子ども）

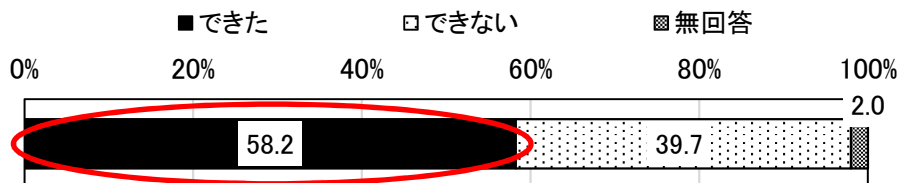
◇ 社会資源の利用状況

＜1番よく行く場所＞



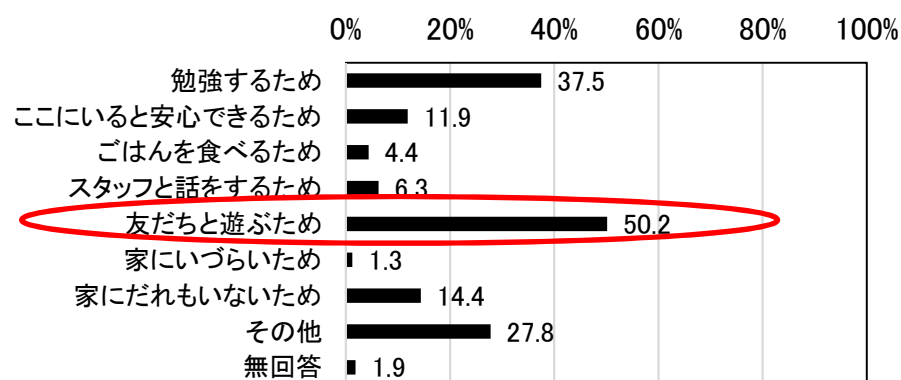
1番よく行く社会資源は「図書館・博物館」が18.9%と最も割合が高く、次いで「公民館」（14.6%）、「学童保育」（13.0%）となっている。

＜1番よく行く場所に来てからの交友関係＞



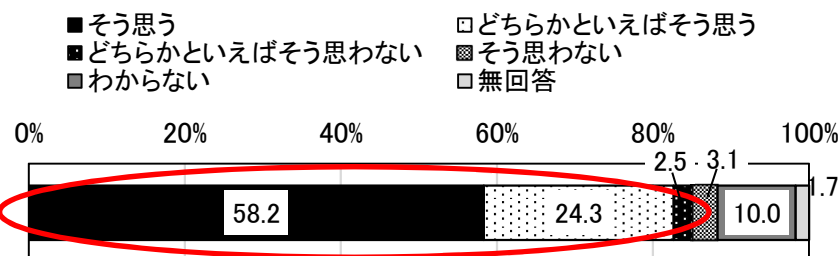
新しい友達ができただけの割合が半数以上を占めており、子どもの交友関係が社会資源の利用を通して広がっていることが推測できる。

＜1番よく行く場所に行く理由＞



1番よく行く社会資源を利用する理由は「友だちと遊ぶため」が半数を占めている。

＜1番よく行く場所に行って良かったと思うか＞

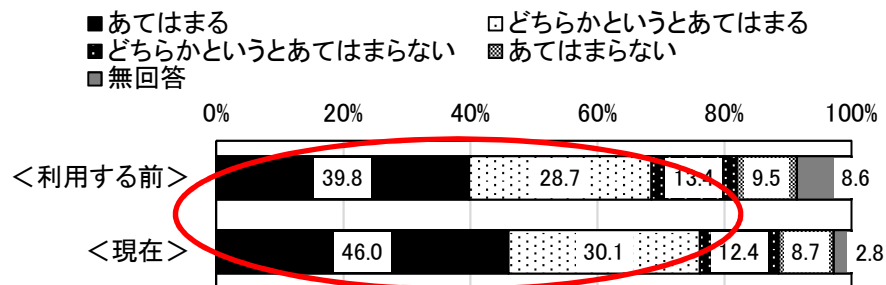


約8割以上が、1番よく行く場所に行って、良かった、または、おおむね良かったと評価している。

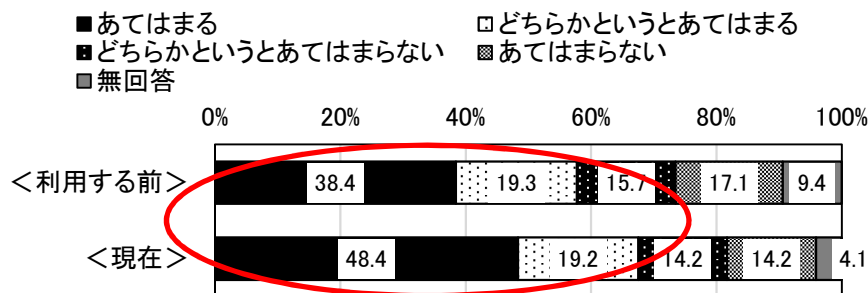
■ 支援状況等調査に関する調査結果（子ども）

◇ 1番よく行く社会資源利用前後の生活状況・学習状況の変化

<同じ時刻に起きる>



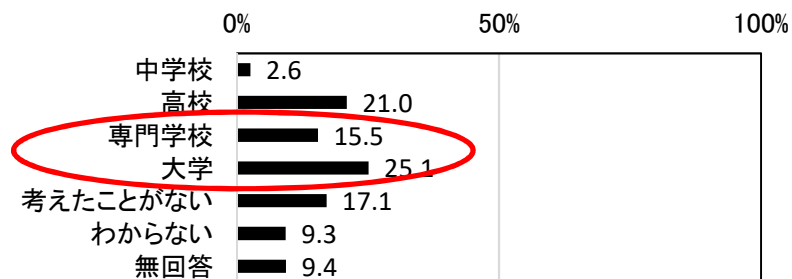
<いままでの人生で、心から感動したことがある>



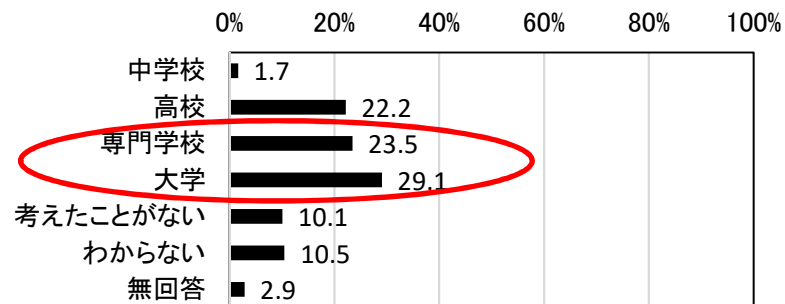
社会資源を利用したことにより、利用前に比べて、子どもの起床時間や感情などに効果的な影響があらわれている。

<進路観>

<利用する前>



<現在>

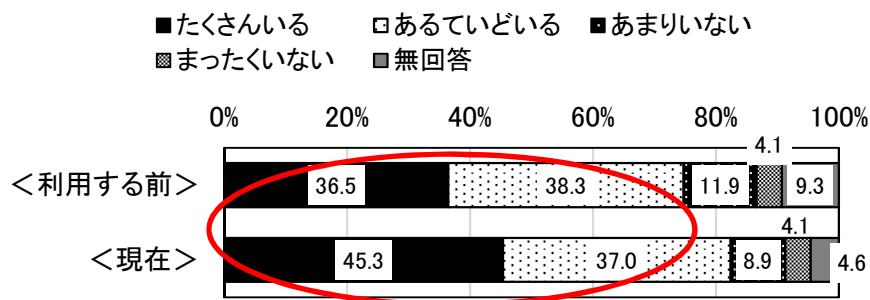


社会資源を利用したことにより、希望する進路のうち「大学」が利用前の25.1%から利用後（現在）は29.1%へ、「専門学校」が15.5%から23.5%へ増加しており、進路観に効果的な影響があらわれている。

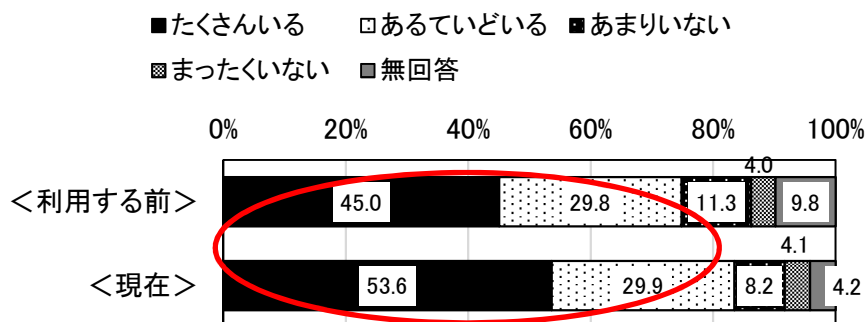
■ 支援状況等調査に関する調査結果（子ども）

◇ 1番よく行く社会資源利用前後の社会的環境・自己効力感の変化

＜何かに失敗したときに、たすけてくれる人＞

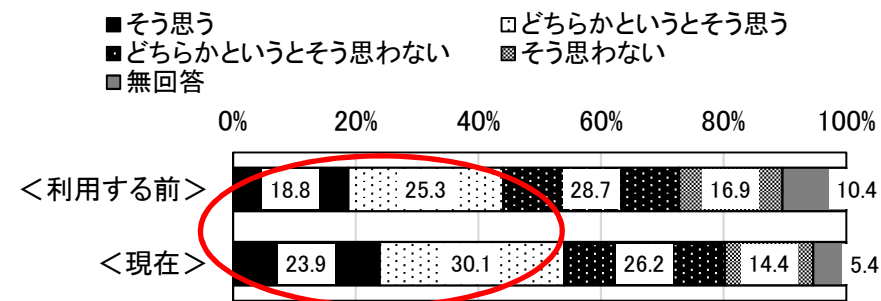


＜勉強やスポーツでがんばったときに、ほめてくれる人＞

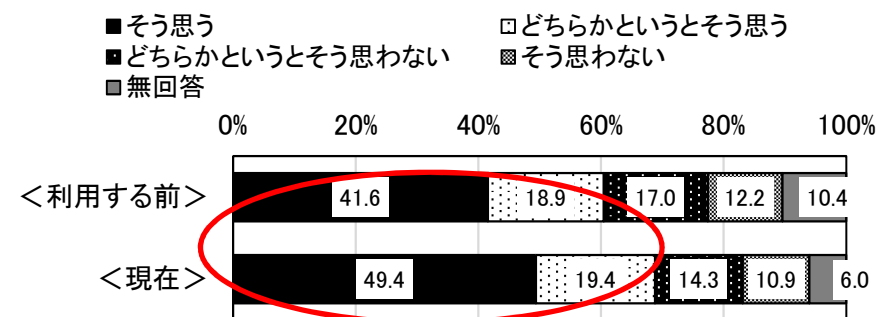


社会資源を利用したことにより、利用前に比べて、たすけてくれる人やほめてくれる人など、子どもの周囲との関係に効果的な影響があらわれている。

＜自分に自信がある＞



＜自分の将来の夢や目標を持っている＞



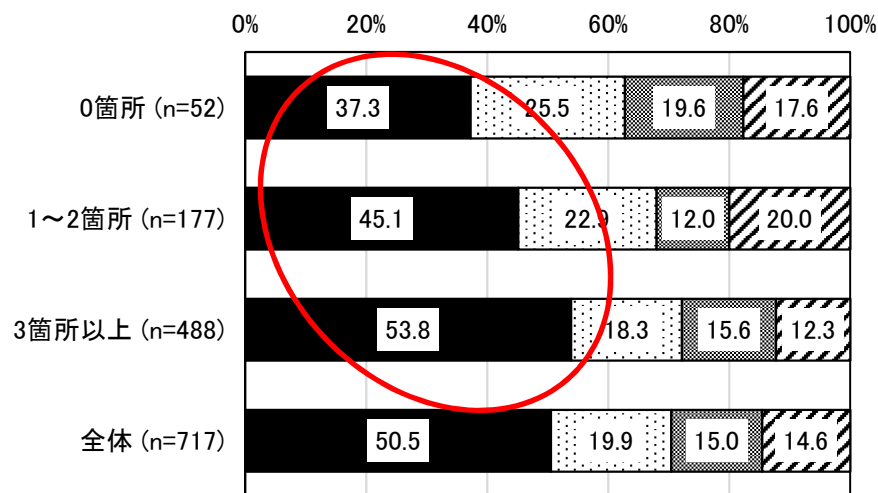
社会資源を利用したことにより、利用前に比べて、自分への自信や将来の夢や目標など、子どもの自己効力感に効果的な影響があらわれている。

■ 社会資源の利用箇所数別に見た分析結果（子ども）

◇ 子どもの状況との関連（利用箇所数別）

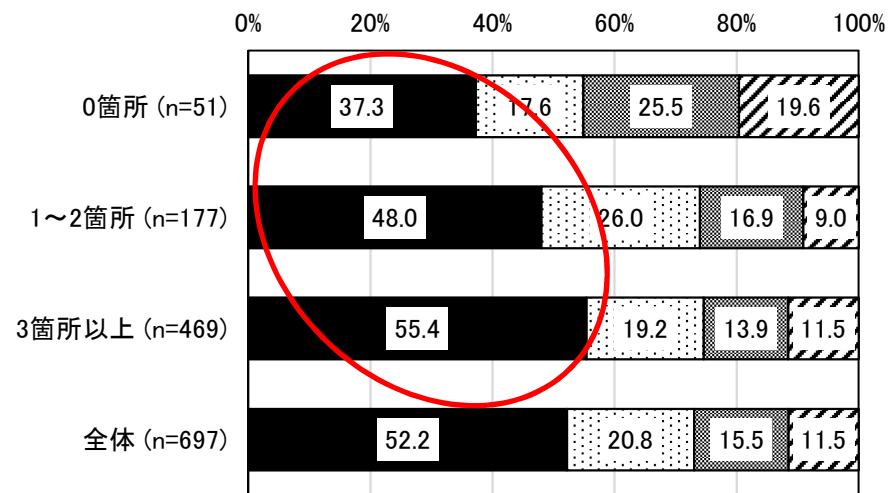
< いままで的人生で、心から感動したことがある >

- あてはまる
- どちらかというにあてはまる
- ▨ どちらかというにあてはまらない
- ▩ あてはまらない



< 自分の将来の夢や目標を持っている >

- そう思う
- どちらかというそう思う
- ▨ どちらかというそう思わない
- ▩ そう思わない

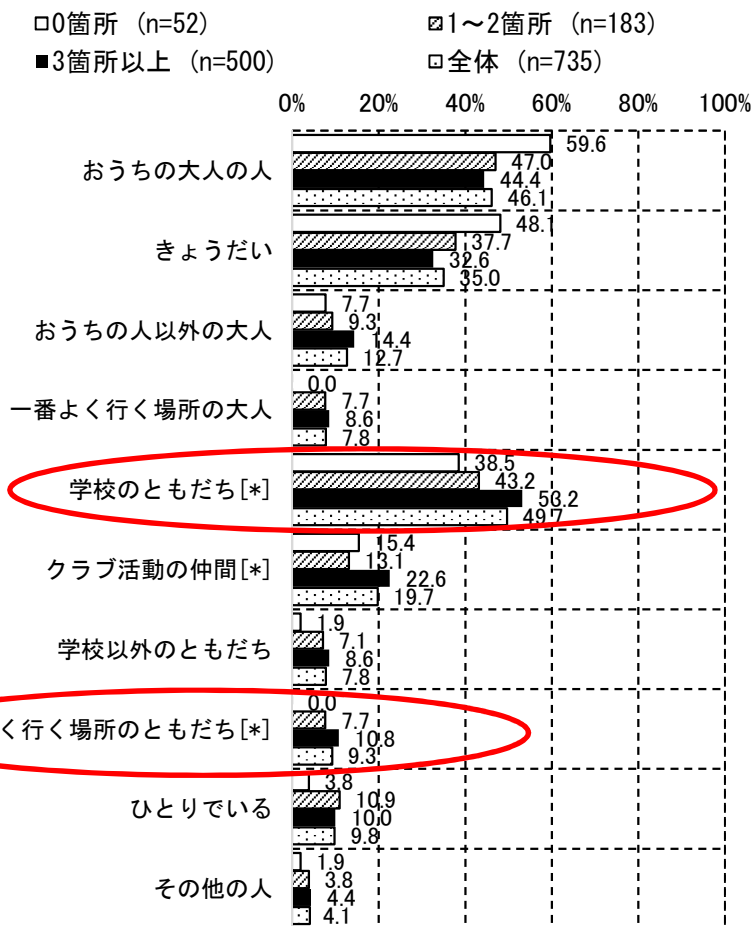


社会資源の利用箇所数が増えるにつれて、「いまで人生で、心から感動したことがある」、「自分の将来の夢や目標を持っている」との問いに、「あてはまる」と回答した割合が高くなっており、社会資源の利用が子どもの人生経験や将来の希望にある程度効果を持つことが推測される。

社会資源の利用箇所数別に見た分析結果（子ども）

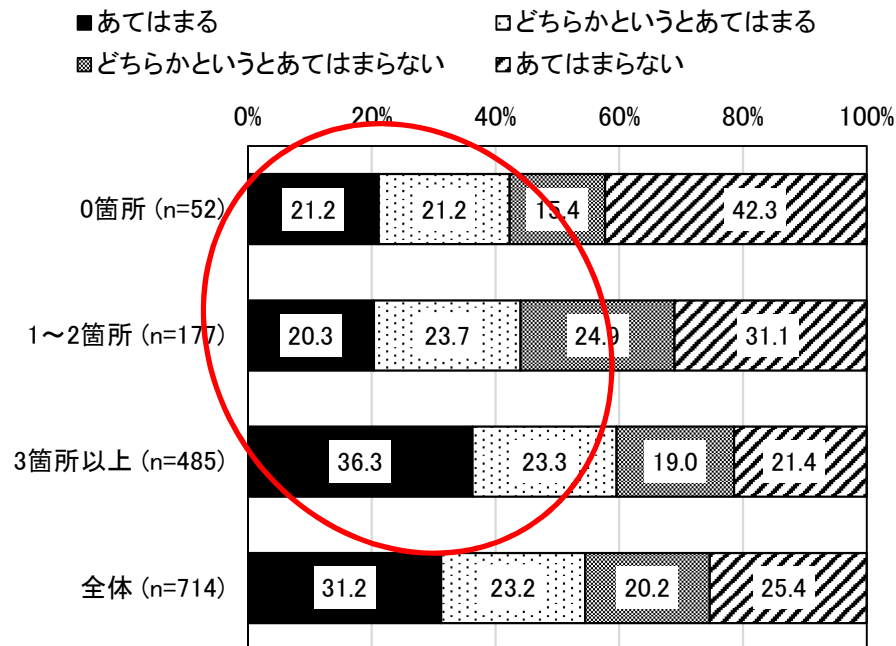
◇社会性との関連（利用箇所数別）

＜ふだんの放課後に過ごす人＞



社会資源の利用箇所数が増えるにつれて、「学校のともだち」及び「一番よく行く場所のともだち」の割合が高くなっている。

＜お祭りやボランティア活動など、地域の行事に参加する＞

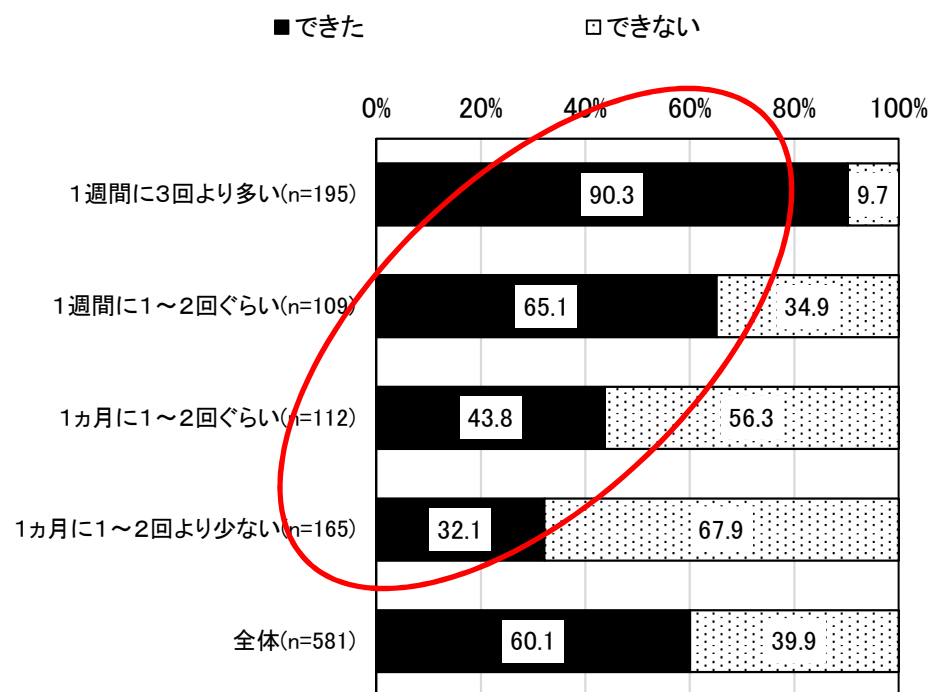


社会資源の利用箇所数が増えるにつれて、地域の行事に参加する割合が高くなっており、社会資源の利用によって、地域とのつながりが構築されていることが推測される。

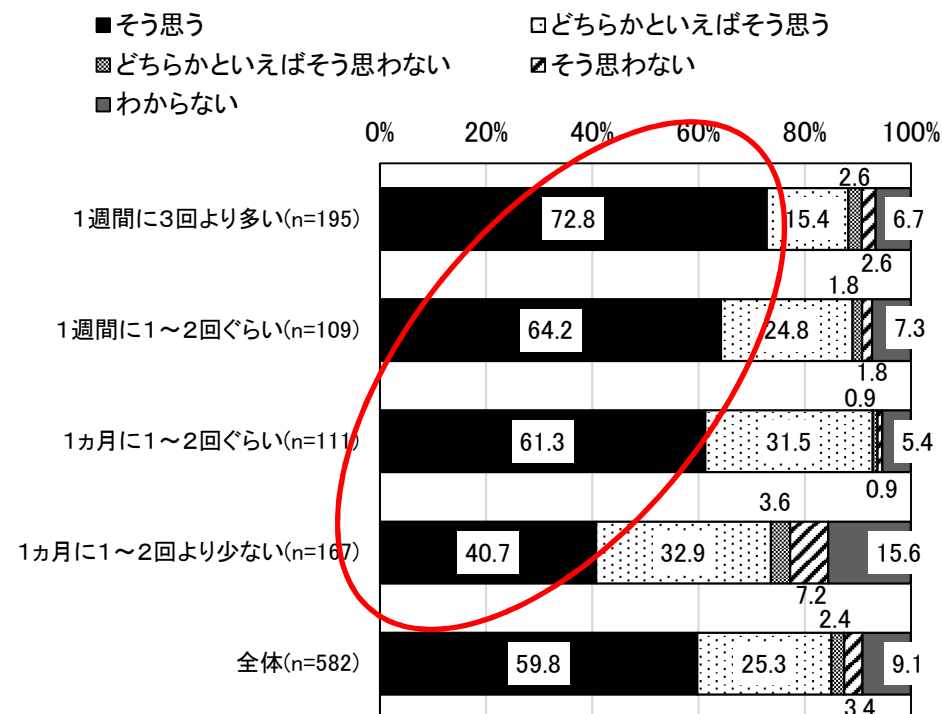
■ 社会資源の利用頻度別に見た分析結果（子ども）

◇ 社会性との関連（利用頻度別）

＜1番よく行く場所に来てからの交友関係＞



＜1番よく行く場所に行って良かったと思うか＞



社会資源の利用頻度が高くなるにつれて、「1番よく行く場所を利用するようになってからの交友関係」、「1番よく行く場所に行って良かったと思うか」との問いに、「できた」「あてはまる」と回答した割合が高くなっており、社会資源の利用頻度が高いほど交友関係や場所に対する評価に効果があると言える。

IV 総合考察

■ 総合考察

1. 社会資源活用による効果や課題について

(1) 社会資源の認知度

- 広く知られていると思われる児童館や学童保育、図書館・博物館などであっても保護者の認知度は65%程度。さらに、子どもの居場所の保護者の認知度は26.6%と極端に低かった。
⇒ 身近にある社会資源を、さらには貧困対策による社会資源をできるだけ広く、子どもや家庭、さらには学校の教職員などの関係者に知ってもらう必要がある。

(2) 保護者の状況の変化

- 子どもが社会資源を利用したことにより、利用前に比べて、子どもとの会話や信頼する気持ちなどが増える一方、不安やイライラなどの感情、圧迫感などが減少していた。
⇒ 社会資源の利用によって子どもとの関係、育児負担感などに肯定的な変化が見られた。
- 子どもの社会資源の利用箇所数が増えれば増えるほど、子どもと図書館に行ったり、本の感想を話し合ったり知的な文化活動が増えていた。また、近所で話す人が増えたり、他の人と話すことを楽しんだり、周囲とのネットワークが広がっていた。
⇒ 社会資源を利用することで親子ともに知識や人間関係の幅が広がると思われる。

(3) 子どもの状況の変化

- 社会資源の利用前後で、同じ時刻に起きる、心から感動した経験、進路観のほか、周囲に助けられる人、ほめてくれる人、自己効力感などが高まっていた。
⇒ 社会資源の利用によって子どもの生活環境、教育環境、社会環境、そして子ども自身に肯定的な変化が見られた。

■ 総合考察

- 社会資源の利用箇所数が多いほど、心から感動する経験や将来の夢や目標を持つことなどが増えており、また、学校以外の友人が増え、ボランティアや地域活動に参加することが多くなっていった。さらに、利用回数が多いほど、友人との交流が多くなり、社会資源を利用して良かったと思う気持ちが高くなっていった。
⇒ 多様な社会資源を継続的に利用することで、子どもたちにより影響を与えることが推測される。

(4) 課題

- 支援が必要である世帯が、今ある社会資源を十分に活用できていない実態が明らかになった。
⇒ 必要な子どもや家庭に社会資源をつなぐ流れができていないことが示唆される。

2. 今後の政策課題について

- 保健センターや学校が積極的に社会資源活用の視点を持ち、支援を必要とされる世帯、子どもへ社会資源がつながる流れを作る。そのためには資源につなぐ人材を、仕組みの中に丁寧に入れていく必要がある。
- 地域の社会資源がより広く必要な子どもを受け入れられるような努力やその方向性を作り、今あるサービスが、貧困対策の意味づけでも活用できることの認識を広める必要がある。

■ 保護者の声（自由記述より） ※原文をそのまま記載

- 年の近い大学生に勉強を教えてもらっています。（親世代の解き方のギャップなどがあって教える事ができなかった。）年齢も近い事で楽しく学び、大学が身近に感じる様な気がします。他者とのコミュニケーションがあり視野が広がるような気がします。一番は楽しく自分のペースで本人がやる気を少しでも出せている事がすごくうれしく思っています。この場に通えている事をすごく幸せに思っています。
- 場所によってではありますが、同年代～年上の子供達とふれあう機会、支援・指導をしている方々に見守られ接してもらえると、子供の気持ちに変化が見られます。成長につながると思っているので、利用できる時は積極的にしたいと思っています。
- 親としては、自分一人で子育てをしているのではない！という安心感や、たよれる人ができて精神的にホッとしました。ありがたいです。
- もっと子どもたちが安心であそべる所、学習する場所があると助かる。一人親の私は、おそくまで仕事で、下校後どうすごしているか心配。
- 学校が休みの日に、子どもが遊びに行ける施設（児童館等）が近くないため、なかなか利用することができない。近くにそういう場所ができて欲しい。
- こんなにたくさんの支援場所があるけど、現実的には、利用しにくい。子供は、支援受けていることを恥じる年齢、居場所があっても、実際、どんなことをしてるのか？メリットが分からず、、利用しづらい。

■子どもの声（自由記述より） ※原文をそのまま記載

- 学校の勉強を教えてくれるところに行けて分からない所も難しかったところも先生に教えてもらえるから、行けてよかった。
- 地域の居場所は、無料で食事や勉強をしてくれるので、あきらめかけていた将来の夢も頑張ってみようと思いました。
- その場所に行くことによって友達が増えいろいろな人と関わる事が増えたことが良かった。
- 無料で食事と勉強をおしえてくれる場所が近くにほしい。
- 簡単に勉強する場所や、無料の食べ物を提供してくれたり高校生でも色々な仕事や物事を体験できたりする場が欲しい。
- もっと、近場に学校の勉強などを教えてくれる場所や、気軽に大人の人の話せる場所があったらいいなと、思っています。
- 高校や専門校、大学の授業料をもう少し安くしてほしい。
- 望むことは、だれにでも、優しくできる人と、がんばっている人がいつかむくわれることです。私は、心がキレイな人になりたいです。